



エコサーファー代表
堀直也さん



「山の日」特集の今回は、海からも森林・林業を眺めてみよう。南伊豆の自然を舞台にサーフィンや小・中学生が対象のサマーキャンプなどの自然体験を企画・運営する、「エコサーファー」代表の堀直也さんにお話を伺いました。

海の男が愛する「緑」 その魅力子どもたちにも知ってほしい

伊

豆半島の最南端、弓ヶ浜（静岡県）の午前九時。まずはサーフィン体験を、と訪れた我々を「おはようございます！何でも聞いてください」と深々と一礼して出迎えてくれた堀直也さん（39才）。日焼けして引き締まった

顔に爽やかな笑顔をたたえる好漢だ。浜に向かって一礼して、いざ海へ。軽やかに波に乗る堀さんを真似てサーフボードに立ち上がろうとするもドボンと落下を繰り返す。意気込みばかり空回りしていると「波に逆らっても勝てませんよ」と堀さん。

「力を抜くことが大事なんです。そして、波や風の状態、自分の技量などいろいろな要素のバランスをとって、今だ！という勝負所を見極める。いい波が来ているも引き返すことだってありますよ」。サーフィンで培われた勘どころは、仕事のさまざまな局面にも通じるそう。

約3時間後、ボードに立てた者も立てなかった者も、沖合からの波を読み、これだ！とひとり乗り出していく魅力の虜になっていた。砂浜のゴミ拾いをして浜に一礼して体験終了。サーフィンの印象がガラリと変わった。

「エコサーファー」の自然体験には、ハイシーズン（7月～9月）に約600



人、さらに杉並区（東京都）の小学校41校の児童、自らが特別講師を務める東海大学海洋学部環境社会学科の学生などが次々とやってくる。その提供プログラムの一つになると「ガチンコ林業体験」がある。サーファーと林業??

「東日本大震災を契機に拠点を湘南（神奈川県）から南伊豆に移したときに、縁あって地元の林業事業体で9ヵ月働いたんです。以前から、自然体験ガイドとして山のことをしっかり勉強したいという気持ちがありました」

——実際に林業をやってみて
いかがでしたか？

「つらいこともありましたが、チェーンソーを扱えるようになり、直径30センチほどの立木を間伐していました。今も『ガチンコ林業体験』や『クワガタ捕り』などで親方には大変お世話になっています」



— 経営者でもある堀さんの目には
どう映りましたか？

「外部への働きかけにまだまだ余地があると思います。自分なら、お客さんに来てもらうためにチラシを配ったり、SNSで発信するのは当然ですから。補助金に頼らず自力で経営できるようにって欲しいと…」

「儲かるためには、木を伐るだけではなく、どう付加価値を見つけるかが大事だと思います。『ガチンコ林業体験』で山に来てくれた子どもたちが喜ぶのを見て、親方はこれだと気づいてくれました。それまでスギ・ヒノキしか目に入らなかった従業員も広葉樹のことを勉強するようになりました。ガイドの僕ではなく、子どもにも伝える『引き出し』を持つ

て、林業の人たちがやることに価値があると思っています」

— もう一度林業をやるとしたら？

「南伊豆では、8割もある雑木林をどう活かすかですね。一つは薪ストーブ。もう一つは『木こりのお宿』をやったら良いと思います。囲炉裏と薪でジビエを料理し、山仕事を体験してもらう宿です。伐採・造林だけではなく幅広い活動に人が来てくれる価値をつけていく様なことを考えたいですね」

「ご自身の名前を『素』直なり、なんです」と紹介する通り、堀さんは率直に語ってくれた。とても属地的な林業の経験則であり短いインタビューだったが、多くを示唆しているのではないだろうか。

ビーチマナー



堀さんから“サーフィン道”という言葉聞いた。礼に始まり礼に終わるサーフィンは、自然を敬い対話しながら行うもの。その精神をよく表すのがビーチクリーン(ゴミ拾い)だ。時には、波に揉まれて角が取れ絶妙の風合いとなったビーチグラスと呼ばれるさまざまな色のガラス片が見つかることがある。堀さんは、これを集めて「ビーチマナー」という地域通貨を広める活動にも取り組んでいる。海をきれいにする通貨に賛同を得て、現在、国内14都府県とハワイの136店舗で通用するまでになった。環境を守る活動と日々の暮らしを繋ぐ取組は、私たちにとってもヒントになりそうだ。

